

参 考 資 料

- 佐渡流人一覧表
- 人物略歴
- 郷土史研究会講演リスト

○佐渡流人一覧表

和 暦	西 暦	職位・肩書	名 前	罪 科
奈養老 六	722	式部大輔・正五位上	穗積朝臣老	乘輿指斥
天平一四	742		川辺朝臣東女	塩焼王の乱倫行為に連座
良祥元	757	播磨守兼内匠頭・正四位下	安宿王	謀反
天祥三	759		僧善神・僧專任	奸悪を悔過せしめようとして還俗の上、流罪
延暦四	785	伊予守・従四位下	吉備朝臣泉	藤原種継暗殺に連座
延暦四	785	能登守・従五位下	三国真人広見	謀反を誣告するに連座
延暦四	785	従四位下	伴宿祢国道	藤原種継暗殺に連座
延暦十一	792	正六位上	安曇 継成	詔旨に従わず
平延暦十五	796		出雲臣乙上	相傷を謀る
延暦二四	805	佐渡国人（伊豆へ流罪）	道公 全成	官鶴の盗み
弘元 元	810	伊勢守・従四位上	藤原朝臣仲成	藤原素子の変で左降
弘元 元	810	従四位下	紀朝臣田上	〃
承和 六	830	遣唐知乗船事・従七位上	伴宿弥有仁	遣唐船から逃亡
		曆請益・従六位下	刀岐直雄貞	〃
		曆留学生・少初位下	佐伯直安通	〃
		天文留学生・少初位下	志斐連永世	〃
承和 九	842	正六位上	藤原朝臣貞庭	承和の変で左降
承和 十	843	内舍人	文室朝臣忠基	父の謀反に連座
嘉祥 元	848	阿波権掾外・従五位下	讃岐 永直	不敬に連座
嘉祥 三	850		金刺福貴満	不明
安貞観 八	866		伴 清繩	応天門の変（伴善男の従者）
元慶 三	879	佐渡国浪人（他国遠島）	高階真人利風	権校尉の鬪殺
元慶 四	880		安倍 吉岡	大逆罪誣告
安和 二	969		僧 蓮茂	安和の変に連座
			藤原 千春	〃
長保 元	999	散位	藤原 致忠	私鬪
寛弘 二	1005	太宰府使	長峯 忠義	宇佐宝殿を封じた罪
長元 四	1031	斎宮権頭	藤原 相通	宅内に大神宮宝殿造営、愚民を惑した科
長元 五	1032	出雲守	橘 俊孝	神託の詐称
長暦 元	1037	散位	如 成	官物負累の罪に連座
永承 二	1047	筑前人	清原 守武	唐への密航
康平 二	1059	前出納大学属	菅野 成経	石清水八幡宮の神人殺害
康平 六	1063	興福寺	僧 某	山陵の事に連座
康平 七	1064	前下野守	源 頼資	放火、殺害
承保 二	1075	散位	源 基宗	国司の訴え
康和 二	1100	中務丞	源 頼治	日枝社の神人殺害
康和 五	1103	伊勢神宮権兼大納言・従五位下	大中臣輔弘	離宮院の放火
嘉承 二	1107	散位	頼 貞	神輿を射、神人殺害
天仁 元	1108	石清水権俗別当	紀 頼遠	不明
天仁 二	1109	前美濃守・従四位下	源 義綱	朝憲に背く
天永 二	1111	下野守・従四位下	源 明国	往来の人との乱鬪
永久 二	1114		千手丸	不軌を謀る
長承 三	1134	前主殿助	平 季盛	伊勢神宮からの訴え

【略 歴】

○谷文晁たにぶんちやう（1763～1840）

江戸後期の南画家。江戸生まれ。画ははじめ狩野派の加藤文麗らに学び渡辺南岳らの影響をうける。古画の模写と写生を基礎に南宗画、洋風画などを加えた独自の折衷的画風を生み、関東の南画様式を確立。田安家に仕官、さらに松平定信の近習となる。「集古十種」の編纂に携わるなど社会的地位を確立、江戸画壇に君臨。寛政文晁とよばれる時期の作品は評価が高い。作品に「隅田川鴻台真景図巻」「木村兼葎堂像」など。

○司馬江漢しばこうかん（1747～1818）

江戸中・後期の洋画家。江戸生まれ。明和・安永年間を中心に狩野派・南蘋派・浮世絵派などの多様な画法を学び、写実的表現への指向を明確にする。天明三年（1783）玄沢の蘭語をたよりにノエル＝ショメールの百科事典の中の「銅版画」の項目を解説、日本最初の腐食銅版画（エッチング）の制作に成功。寛政年間以降は油彩画の制作が盛んになり、西洋画の模写を経て油彩画の技法による日本風景画を完成した。天文学・地理学など西洋学問への強い関心を示したが、晩年の言動には老荘思想の影響が濃い。代表作に「東京八景」「相州鎌倉七里浜図」「和蘭天説」などがある。

○中根半仙なかねはんせん（1798～1849）

名は容、字は公然、号は半仙、諷齋ともいう。江戸に住み、医術をもって高田藩に仕えた。書・詩・篆刻に堪能した。「詠物百首」「半仙小稿」がある。収蔵は第一回江戸遊学の際、半仙のもとで篆刻を修行した。

子は半嶺。幼時幕府の医学館に入り、父の職をついで高田藩侍医兼書道師範となり、廃藩後は相談役に挙げられ主家の家政に参与。大正元年（1912）辞職、大正三年没、84歳。その書ははじめ菱湖風だったが、曹全碑を学んで隷書を得意とした。

○大槻玄沢おつぎげんたく（1757～1827）

江戸中期の蘭方医、蘭学者。玄沢は通称。はじめ陸奥一関藩医建部清庵に医を学び、のち江戸に出て杉田玄白、前野良沢に蘭学を学ぶ。天明五年（1785）長崎に遊学、翌年江戸に帰り仙台北藩主伊達氏の侍医となり、蘭学塾芝蘭堂を開く。同塾には「蘭学階梯」に刺激をうけた俊秀が全国から参集、オランダ正月（新元会）の賀宴で江戸蘭学の中心的存在となった。訳書に「重訂解体新書」ほか多数。

○大黒屋光太夫だいこくやこうたゆう（1751～1828）

近世後期の船頭、漂流民。伊勢国安芸郡白子生まれ。天明二年（1782）十二月白子浦を出帆して江戸に向った神昌丸が遠州灘で暴風雨にあい漂流、翌年アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着。4年間在島ののちカムチャッカに移り、1789年イルクーツクに到着。ラクスマンの知遇を得て91年ペテルブルグに女帝エカテリーナ二世に拝謁、帰国を許される。ラクスマンの子アダム・ラクスマンの根室来航に伴われ、小市、磯吉とともに送還された。小市は根室で没したが、光太夫と磯吉は江戸番町薬園に軟禁。桂川甫周が光太夫から聴取した「北槎聞略」は貴重なロシア情報となった。

○伊東玄朴いとうげんぼく（1800～1871）

肥前生まれ。島本竜崎に医を、長崎の大通詞猪股氏にオランダ語を学び、ついでシーボルトにも学ぶ。1826年シーボルトの江戸参府に同行、そのまま江戸に残り、33年御徒町に蘭学塾象先堂を開く。弘化年間、痘瘡流行に際し、牛痘苗の導入を佐賀藩主に御側医として進言、嘉永二年（1849）出島に到着した痘苗で長崎、佐賀で種痘に成功、西日本に普及。安政五年（1858）江戸の蘭方医と神田お玉ヶ池に種痘所を設立、これがのち東大医学部の前身西洋医学所となる。訳書多数。

○藤沢明燭(1782~1854)

父、子山は相川の医師藤沢長達の子で、兩津市湊に住む。初め入江南溟の門に入って儒学をおさめ、後に山脇東洋、吉益東洞に就いて医術をきわめた。天明二年(1782)、佐渡奉行所に出仕して論語を講じた。「佐渡志」三巻ほかを著し、寛政十年(1798)60歳で没。その長子、明燭は医業を継ぎ、上方に遊学し蘭方をおさめる。天保年間に帰郷して、佐渡で初めて西洋医として開業、活躍した。

○古賀謹一郎(1816~1884)

幕末・維新期の儒者・洋学者。幕府儒官古賀精里の孫。朱子学者として家学を継ぐ一方、洋学にも関心を深めた。嘉永六年(53年)ロシア使節を長崎で応接し、その後洋学所(のち蕃書調所)設立に努め、頭取となる。外交文書の起草や翻訳に活躍。維新後、徳川慶喜に従って静岡に移る。

○司馬凌海(1839~1879)

幕末、明治初期の蘭方医。佐渡真野町新町生まれ。嘉永三年(1850)江戸に出て、唐津藩の儒者山田寛について漢籍を学ぶが、五年には、松本良甫に蘭学を、佐藤泰然に医学を学ぶ。安政四年(57)18歳の時、帰島して開業。万延元年(1860)松本良甫の嗣子良順の勧めでオランダ医ボンベに学ぶ。明治元年東京に出て医学校教授となり、のち少博士、宮内省出仕などを歴任、75年退官。この間、東京下谷練堀町で日本初のドイツ語私塾「春風社」を開く。明治5年には日本最初の独和辞典「和訳独逸辞典」を出版。語学の天才といわれた。司馬遼太郎「胡蝶の夢」の副主人公(伊之助)は凌海がモデル。

○本荘了寛(1847~1920)

佐渡相川生まれ。金井町浄土真宗得勝寺住職。幼名は数馬、号は思水。明治三年、越後の儒者、青柳剛斎の塾に入り、さらに京都に上り島地黙雷に西洋宗教を学ぶ。明治九年帰郷後、本屋敷村(金井町千種)で小学校教師を十一年勤めた。明治二十年十一月、北溟社を興し、佐渡最初の定期行物となった月刊「北溟雑誌」を創刊(明治二六年、第六八号で廃刊)。同三五年、日清、日露の戦死者を祀る「明治記念堂」(金井町)を建て、その霊と遺族をなぐさめるとともに開導館(博物館)を建てると、佐渡の教化に尽くした。

○松沢伊八(1835~1893)

嘉永三年(1849)赤泊港より武部喜八郎の回船で蝦夷地江差に向かい、武部の紹介で呉服商川端武右衛門に奉公。主人の川端の死後、幼少の当主の後見をつとめ、主家を繁栄に導く。慶応二年(1866)独立して幕府官米の精米業を始めたが、維新で挫折。その後は古着店を開き、維新の混乱の東京で古着を安く仕入れ、江差で売って成功をおさめ、小樽にも支店を出し古着から呉服を商うようになった。呉服は京阪から直仕入れをして評判を呼んで地位を固める。やがて三井物産と結んで北海道のスルメの中国輸出に尽力。さらに魚油産業・汽船会社の経営も行い、初代江差郵便電信局長を務め、田畑開墾や道路改修、江差灯台建設などの公益事業にも功績を残した。江差には5mもある松沢伊八記念碑が建っており(明治三十年建立)、また近くの正覚寺に「瓊江丸記念碑」が建っている。

○益田孝(1848~1938)

佐渡生まれ。六歳のとき一家は江戸にのぼり、さらに父が函館奉行動務となり十二歳までいて再び江戸にのぼる。十四歳で米国公使館の「支配通弁御用」となった。文久三年(1863)幕府の遣欧使節に幕臣の父孝義とともに随行。明治元年騎馬頭となったが維新のため浪人となった。横浜で「相川屋」という古着屋を営んでいるうちに大蔵大輔井上馨の勧めで大蔵省に入り、造幣権頭となった。のち井上とともに辞職し、先取会社に加わる。明治九年(1876)同社の業務

が三井物産に引継がれると、統轄（社長）に就いた。1902年三井家同族会管理部専務理事となり、三井家の組織改革を主張、1909年三井合名会社を設立して、コンツェルン体制を確立。男爵。茶人としても知られ、鈍翁と号した。

○本多利明（1743～1820）

越後国蒲原郡の生まれ。江戸音羽に算学・天文の塾を開く。1801年に蝦夷地に渡航、幕府から蝦夷地案内に召されたが、辞退。一時加賀藩に伺候したほかは生涯浪人を通ず。著書に「経世秘策」「西域物語」などがあり、国産開発と海外交易・北方殖民の必要性を主張した。

○田中葵園（1783～1846）

通称は従太郎。佐渡相川生まれ。和漢神仏の經典に通じ、歴史礼法に詳しかった。はじめ西川恒山に学び、のち江戸に出て林述斎に学ぶ。亀田鵬斎が佐渡へ来た時「葵園に就かば上京の要なし」とその学問の深いことを激賞した。文政六年（1823）幕府に請うて広惠倉を興して米穀に備え、広業堂で子弟教育。1825年奉行所構内に昌平齋にまねて修教館を創建、士人の子弟を教育したが、これが佐渡の最初の学校である。著書に「佐渡志」がある。

（『日本史広辞典』山川出版社、『図説佐渡の歴史』郷土出版社、『新潟県大辞典』新潟日報事業社、『新潟県人』新人物往来社等に拠りました。）